１　文献名

『百年史　梶賀小学校』

２　学校名

梶賀小学校

３　災害名

昭和 19 年（1944 年）昭和東南海地震

４　記述の概要

（１）雨や風、地震などの様子

地震が起こったとき、身が倒れそうで、歩くことができなかった。池の水が激しく動揺した。地震がやんでから 15～16 分して津浪が襲来した。浜はすでに海水が盛り上がり、浜の隠居の石垣いっぱいに浸水、常盤橋の上も浸った。向井で 3.2m、奥の橋付近で 2.5m 位上った。第一回目の浪が引いてしまうと、宮の浜の堤防沖合まで海の底があらわれたが、順次干満の度合も小さくなった。第二回目の浪は高さ六七尺、第五回目に至って平静に復した。(P64)

夜に入っても大小の地震が 15、16 回揺った。(P65)

（２）学校内や地域の被害の状況

第一回目の津浪で、海岸にあげてあった船、船具、木材、ドラム缶、網等は流失して海上を漂い、奥の川深く押し流されて打ち揚げられた。

１名が崩壊土砂の下敷きになって死亡、流失家屋１、浸水家屋６、倉庫浸水２、船舶（和船）３せき破損、屋根崩壊（部分）５箇所、畑地崩壊（部分）57 箇所。

翌日８日未明にモーター船で賀田や曽根に行ったが、海上には流失した木材、倒壊家屋、家具などが無数に浮かんでいて、船の航行が困難であった。

この地震で海岸の地面が約１m沈下し、古来船を陸揚げできた個所も満潮になると約１m増水して不能となってしまった。(P65)

（３）復旧の様子

（４）体験談

地震が揺りやんだ後、家の戸締りをして裏口から畑伝いに、梶賀の中での安全地帯として村中の人達の避難場所である、曽根道のオオダへ避難した。

婦人会の役員会に出席していた人たちは、帰る途中網代までくると浸水して通れないので、上の山を通って梶賀道に出たとき、煙幕を張ったように白くなって、賀田は一寸も見えなかった。(P64)

（５）教訓など

（６）その他